研究 NO. 2203

リノベーション工事における第三の担い手の萌芽

主査　河野　直*1
委員　小坂　知世*2，ブライアン　オルテガ　ウェルチ*3，河野　桃子*1

職人でも DIYer でもない「第三の担い手」がリノベーション工事の一部を担い始めている。彼らは建築に関わる職歴や学歴を有していないが，メディアやワークショップ等を通じて技能を高め，趣味の DIY を生業としての施工に転じた人物である。その実態を明らかにする事を目的に，日本の第三の担い手 10 名とステークホルダーにヒアリングを行った。米国調査では，先行事例から課題や社会的背景を考察した。研究結果として，多能工的な施工，DIYer や職人との協働，人間関係の構築を含めた属人的な技能等の特性を把握した。職人が仕事として受けづらい空き家の改修を担う等，建設業及び地域社会における第三の担い手の役割の骨格が見えた。

キーワード：１）リノベーション，２）DIY，３）建設技能者，４）空き家活用

EMERGENCE OF A "THIRD ACTOR" IN ARCHITECTURAL RENOVATION

Ch. Nao Kono
Mem. Tomoyo Kosaka, Bryan Ortega-Welch, Momoko Kono

Architectural renovation in Japan is being performed by an emerging class of self-taught craftspeople who are neither professionals nor casual DIYers. These “Third Actors” acquire their skills through various media sources and workshops. We interviewed ten of these individuals and their associated stakeholders in Japan, plus an additional two in the United States, to elucidate their activities and surrounding context. Our study reveals that these practitioners possess a diverse skill-set, encompassing wide range of building techniques as well as relationship-building, indicating their potential role within the construction industry and the local community.

1.　はじめに

1.1　背景―建設技能者の減少と DIYer の増加

日本における建設技能者の不足が深刻である。建設技能者の育成と定着が急務だが，国土交通省支援による大工育成塾や，外国人技能実習制度による外国人技能労働者の受け入れ促進といった対策も問題解決に有効とは言い難い。2020 年には全建設業就業者数の 36％以上を 55 歳以上が占め，建設技能者は高齢化の一途を辿っている[文1)]。建設技能者不足の打開には新たな視座が必要である。

一方，近年の DIY ブームにより，住居や店舗などの空間の内装工事や家具などの造作を自ら DIY で行う人（以下，DIYer とする）が増加している。社会生活基本調査による日曜大工の行動者率の変遷を見ると，2011 年以降，男女共に増加傾向にある[文2)]。また近年は空き家や空室改修の手段としてのセルフリノベーションにも注目が集まっている[文3)]。DIYer は，建築の維持管理やリノベーションにおいて既に重要な役割を担い始めている。

A・トフラーは，DIYer の様に生産活動を担う消費者をプロシューマー（生産消費者）と定義した。建築・医療・農業等におけるプロシューマーの台頭を予言し，その時代を「第三の波の時代」と呼称した[文4)]。2000 年代後半以降のメイカームーブメントでは，DIY と WEB が出会い生産に必要な技術へのアクセスがオープンになり，消費者が生産と販売を行う動向が様々な産業で見られる様になった[文5)]。

日本の建築分野においても建設技能に関する情報が，近年は web などのメディアやワークショップによって一般にも広く共有され始めている。例えば， YouTube チャンネル「大工の正やん」では，熟練した大工が大工技能について解説し，多くの支持を集めている[文6)]。建設技能に関する情報を手に入れやすくなったことで，DIYer はさらに建設技能を高めることが可能になったと言える。

こうして一部の DIYer が成熟する中，特に空き家改修等のリノベーション工事において，教育機関や職場で建築分野に携わらずとも建設技能を身につけ，施工を仕事にするようになった DIYer が散見される[注1)]。

*1 合同会社つみき設計施工社 共同代表　*2 合同会社つみき設計施工社　*3 ハーバード GSD 研究員 修士（建築学）

このような従来の建設技能者とは異なった出自を持つ一部の成熟したDIYerを,新たな担い手と捉えることで,建設産業の裾野を広げ，建設技能者不足の解決へ新たな視座を与えることが可能ではないだろうか（**図 1-1**）。

図 1-1　新たな担い手の萌芽

1.2　研究の目的と方法—第三の担い手への着目

そこで本研究では,「建築に関わる職歴または学歴を有しておらず，対価を貰って施工を行う活動を継続的に行う人物」を「第三の担い手」と定義し，着目する（**表 1-1**）。本研究の目的は，第三の担い手の活動実態を明らかにし，建設業および地域社会における役割を考察することである。

本研究の方法は，第三の担い手およびそのステークホルダーを対象としたインタビュー調査である。インタビュー調査を行うにあたり，対象となる第三の担い手の条件を以下のように設定する。

① 建築の施工および設計を主な事業とする職場で働いた経験がない。
② 高校，専門学校，大学，大学院で建築を専門とする学科またはコースで学んだ経験がない。
③ 自ら行う施工に対価が伴う。
④ 対価が伴った施工を行う活動を１年以上続けている。

表 1-1　第三の担い手と職人および DIYer の違い

	職人	第三の担い手	DIYer
建築に関わる職歴または学歴	あり	なし	なし
自ら行う施工に対価	あり	あり	なし

本研究は６章で構成される。第２章は，日本における第三の担い手 10 名へのインタビュー調査により，来歴や活動の内容,技能の習得について把握する。第３章は，第２章のインタビュー調査対象者から２名を抽出し，それぞれの活動におけるステークホルダーへのインタビュー調査を通して，第三の担い手にまつわる人や物の関係性および活動の特徴について考察する。第４章は，第三の担い手とともに施工した経験を持つ職人へのインタビュー調査により，職人から見た第三の担い手の可能性と課題を把握する。第５章は，米国では先行して萌芽したと考えられる第三の担い手の実態を捉え，職能の可能性と課題，職能成立の社会的背景を考察する。第６章は，得られた知見と今後の課題を述べる。

1.3　研究の位置付けと新規性

建設技能者の減少について，蟹澤（2004）は専門工事業者の処遇を切り口に,「一人親方」や非正規雇用が過半数である建設労働市場のマクロモデルを明らかにした[文7)]。技能の継承については，蟹澤ら（2008）が木造建築における大工の減少を背景に，師弟間で暗黙知的に蓄積・継承されてきた継ぎ手などの技能をデータ化することで,持続可能な木造建築の生産システム構築を目指した[文8)]。一方，野村ら（2013）や三原（2006）は，建設技能者の育成システムに着目し，従来の徒弟制度とは異なる有効な教育の体系化方法を検討している[文9)10)]。こうした既往の研究では，建築業界の従来のシステムを再構築することで建設技能者に関する問題の解決を目指している。本研究の新規性は，先の問題解決策として，建築業界の枠組みの外にあったDIYに着目する点にある。

DIYに関する研究として，大野（1999）は，住宅構法の視点からDIYを捉え， DIYによる改修作業を促進するために重要な住宅構法の計画上の留意点を示した[文11)]。山崎（2000）は，住宅管理の視点からDIYに着目し，居住者のDIY技術の向上が住宅の維持管理行動を促進させることを明らかにした[文12)]。鈴木ら（2006）は，公的賃貸集合住宅における個別のリフォーム方法としてDIYに着目し，DIYリフォームモデルを構築，検証している[文13)]。これら既往の研究により，住宅改修におけるDIYの有効性が明らかにされてきた。本研究の新規性は，誰でも建設技能に関する情報を得やすくなった背景を捉え，技能の向上が自宅の住環境改善の範疇を超え，趣味としてのDIYが事業にまで発展した事例を扱う点にある。

2.　現在活動する第三の担い手の実態

2.1　調査の概要

第２章では，現在活動する第三の担い手へのインタビュー調査を通して，第三の担い手の来歴や現在の活動，今後の展望を把握する。インタビュー対象者は，2010年よりワークショップ等を通じたDIYerの技能育成に取り組んできた主査の知人や，同様の事業を行う知人の紹介から選定した。また，本研究における第三の担い手の定義に該当することを確認した上で，活動地や活動内容が画一的にならないよう配慮した。

インタビュー調査の概要は**表2-1**①調査対象の通りで，2022年９月～2023年８月にかけて，個別にオンラインまたは対面で行った。半構造化インタビューの質問項目は**表2-2**の通りである。また，一度のインタビューで情報が不足していた場合は，追加インタビューを行った。

表2-1　インタビュー調査の質問項目

①基本	氏名/生まれ年/性別/居住地/活動概要
②来歴	教育歴/職歴/技術習得の経緯/DIYを始めたきっかけ/活動に至るきっかけ
③現在	具体的な2～3案件と施工内容/活動地域とその理由/活動の頻度/顧客属性/仕事の取り方/兼業状況/価格設定/やりがい/悩み/協業状況
④将来	今後の活動展開/今後の技術習得意向

本調査で得られた結果を,①現在の活動形態②活動が始まるまでの経緯③技能習得の順に述べる。

2.2　第三の担い手としての現在の活動形態

2.2.1　第三の担い手の業務形態

対象者の第三の担い手としての業務形態について，**表2-2**の②業務形態に整理した。

第三の担い手がリノベーション工事において担う業務は,自ら行う施工と,施工に参加するDIYerのサポート(以下，DIYサポートとする)の２種類が見られた。自ら行う施工については2.2.2で述べる。DIYサポートとは，ワークショップや手伝いに参加するDIYerに対する技術指導や，共同作業による施工補助である。対象者10名全員がDIYサポートの経験があった。

これらの業務に対する対価の受け取り方は,「A.施工モデル」「B.指導モデル」「C.運営モデル」に分類された（**図2-1**)。「A.施工モデル」は，自ら行う施工に対して，工事費用や人件費を受け取るモデルである。「B.指導モデル」は， 技術指導に対して対価を受け取るモデルであり，その中でさらに２つに分けられる。一つは，第三の担い手がワークショップ等を主催し，参加費を受け取るモデル(B-1)であり，もう一つは，他主体が主催するワークショップ等で講師費等を受け取るモデル(B-2)である。「C.運営モデル」は，自ら施工した空間に発生する利用料や賃料を受け取るモデルである。

兼業については，対象者 10 名中７名が，フォトグラファーやグラフィックデザイナー，果樹園農家，まちづくりコンサルタントといった職業と兼業していた。一方で，対象者 10 名中６名が第三の担い手の活動によって主な収入を得ていた。

2.2.2　施工案件

対象者の施工案件の事例および対象者が自ら行う施工内容を，**表2-2**の③施工案件に整理した。

対象者が手がけたリノベーション工事には，主に住宅用途および商業用途の多様な案件が見られた。住宅用途の案件として,古民家を含む戸建て住宅やDIY賃貸を含む集合住宅居室等が見られた。商業用途の案件として，ゲストハウスなどの宿泊施設，美容室などの店舗，カフェなどの飲食店が見られた。

全員が解体工事，大工工事，造作工事，内装工事といった複数種の工事を幅広く行い，多能工としての役割を担うことが分かった。最も多く見られたのは,解体工事,大工工事，造作工事，内装工事の一連の工事を担うパタ

表2-2　第三の担い手の実態調査概要

①調査対象	対象者	S.T	Y.A	M.I	Y.H	T.K	S.S	Y.S	H.I	T.S	Y.O
	生まれ年	1966	1985	1973	1989	1967	1989	1956	1979	1970	1981
	性別	男性	男性	女性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性
	調査日	22/9/6 オンライン	22/9/7 対面	22/9/12 オンライン	22/9/21 オンライン	23/1/12 対面	23/1/16オンライン	23/3/12 対面	23/4/19 オンライン	23/6/17 オンライン	23/6/28オンライン
	追加調査		23/5/13対面	23/8/15 対面	23/9/23 オンライン			23/4/3 オンライン			23/08/25対面
②業務形態	活動開始	2021	2013	2003	2016	2010	2016	2019	2011	2016	2011
	業務概要	店舗や住宅等の内装や什器制作をDIYer仲間と共に行う	賃貸物件の3代目大家であり空室の修繕・改修の大部分を自身で担う	大家向けのDIYサポートや,住宅や店舗のリノベーション工事を行	理事を務めるNPOで空家の改修と活用。個人でもDIYサポートを行う	ゲストハウスやシェアキッチンのリノベ工事を行い夫婦で運営する	DIYワークショップで講師を勤め、個人でも家具製作等を行う	住居や店舗のリノベーション工事をDIYer仲間と共に行う	床はりやブロック塀解体のワークショップを主催し指導する	賃貸やシェアハウス、宿泊施設等のリノベ工事と運営を行う	美容室を中心とした店舗の内装工事や住居の部分施工を行う
	モデル A.施工	●		●	●(個人事業)			●			●
	モデル B.指導			●			●		●		
	モデル C.運営		●		●(NPO事業)	●				●	
	兼業	コンサル業	なし	なし	グラフィックデザイン	森林整備等	グラフィックデザイン	なし	果物農家等多数	コンサル業	フォトグラファー
③施工案件	案件例①	研修所から宿泊施設へのヘリノベ工事(2021)	賃貸居室のオーダーフルリノベ工事(2017)	リペア職人のオフィスの内装・造作工事(2020)	店舗からシェアハウスへのリノベ工事(2019)	ゲストハウスの内外装・外構工事(2012)	コワーキングスペースの内装・什器製作(2021)	納屋からカフェ兼食品加工場へのリノベ工事(2023-現在)	店舗の床張り替え工事(2012等)	診療所からゲストハウスへのリノベ工事(2018)	美容室の内装工事(2021)
	施工内容	解体/造作/大工/内装/	解体/造作/大工/内装/建具	造作/大工/内装	解体/造作/大工/内装	解体/造作/大工/内装/建具/外構	造作/内装	解体/造作/大工/内装/建具	解体/大工	解体/造作/大工/内装	解体/造作/大工/内装/金属加工
	案件例②	DIY可能賃貸物件の居室の造作工事(2022)	賃貸物件1Fテナントの店舗内装工事(2017)	DIY賃貸物件の内装・造作工事(2017)	戸建て住宅の内装仕上げ工事(2019)	古民家からシェアキッチンへのリノベ工事(2023-現在)	市営交流センターの造付け家具・什器製作(2022)	古民家の構造補強・内外装工事(2016-現在)	住宅のブロック塀の解体工事(2018等)	宿舎からDIY賃貸物件へのリノベ工事(2016)	住宅の階段手すり製作設置工事(2023)
	施工内容	内装/造作	解体/造作/大工/内装/建具	造作/内装	内装	解体/造作/大工/内装/建具	造作	解体/造作/大工/内装/建具	解体	解体/造作/大工/内装	金属加工/造作
④エリア	居住地	千葉県館山市	千葉県松戸市	埼玉県さいたま市	佐賀県有田町	千葉県睦沢町	新潟県新潟市	千葉県富津市	東京都品川区	千葉県館山市	北海道札幌市
	活動地域	館山・南房総市が中心	松戸市	首都圏	有田町及び隣接する市町村	睦沢町	全国	富津市・南房総市館山市が中心	全国	館山市	札幌市
	地域展開	居住地近郊型	居住地近郊型	広域展開型	居住地近郊型	居住地近郊型	広域展開型	居住地近郊型	広域展開型	居住地近郊型	居住地近郊型

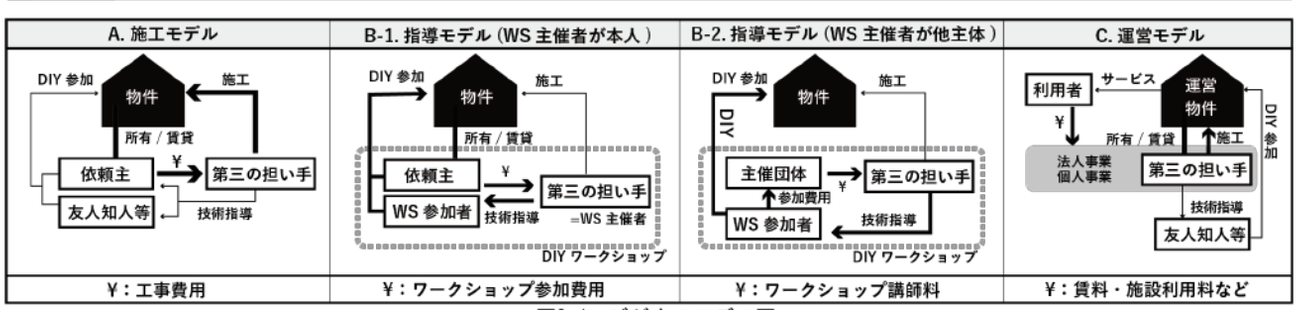

図2-1　ビジネスモデル図

ーンである。例えば，T.K 氏の事例では，ゲストハウスの石膏ボード貼り工事からパテ塗りや左官を含む内装工事，建具工事までを一貫して行っている（**写真 2-1**）。また，Y.O 氏の事例では，美容室の改装工事において，解体工事，カウンター等の造作工事，仕上げの左官および塗装工事，什器の金属加工工事を行っている（**写真 2-2**）。

一方で，対象者全員が，許可や免許を要する設備工事と難易度の高い大工工事や内装工事を，職人や工務店に外注していた。大工工事の外注例として，床貼りワークショップを行う前に，状態の悪い束と大引きの補修を大工に依頼する H.I 氏の事例等が見られた。内装工事の外注例として，綺麗に貼る難易度が高い柄付きクロスの時だけクロス職人に外注する M.I 氏の事例等が見られた。

このように，第三の担い手が，単一の工事を専門的に行うよりも，現場で求められる多様な作業に幅広く取り組む傾向にあり，経験や技能の不足を，職人との連携によって補う実態が示唆された。

写真2-1　T.K氏施工のゲストハウス

写真2-2　Y.O氏施工の美容室

2.2.3　顧客からの需要

顧客が第三の担い手に依頼する理由として「プロに頼むほどのお金がない」「内容が些細で，プロに頼むほどでもない」趣旨の回答が多くみられた。プロに頼むほどのお金がない事例として，老朽が著しく進む古民家の改装工事を身近な知り合いであった第三の担い手に依頼する事例等が見られた。内容が些細でプロに頼むほどでもない事例として，洗面室に棚を取り付ける工事を第三の担い手が担う事例等が見られた。このように，リノベーション工事の中には予算や工事規模の事情からプロの職人や工務店へ依頼しづらい領域が存在し，それらのニーズの一部を第三の担い手が担う構図が示唆された。

2.2.4　活動地域と活動展開

対象者の活動する地域は**表 2-3**④エリア欄にまとめた。活動地域は，札幌市や東京都 23 区内を含む都心部，館山市を含む地方都市，睦沢町を含む農村部など多様である。

対象者の活動地域と居住地から，活動展開の仕方に着目する。活動展開のパターンには，「居住地近郊型」と「広域展開型」の２つが見られた。

「居住地近郊型」とは，第三の担い手の居住地近郊を主なエリアとして活動が展開されるパターンである。これには，富津市に居住しながら同市や近隣の市町村を中心に施工を行う Y.S 氏の事例等が見られた。

一方，「広域展開型」とは，複数の都道府県をまたいだ広範囲に活動が広げられるパターンである。これには，東京都内に居住しながら全国各地でワークショップを行う H.I 氏の事例等が見られた。

これらの活動展開と 2.2.1 で分類したビジネスモデルを照らし合わせると，「B.指導モデル」の活動は「広域展開型」であり，「A.施工モデル」および「C.運営モデル」の活動は「居住地近郊型」である傾向が示された。この考察は以下の３点を論拠とする。

①指導モデルの活動は，対象者 10 名中３名が行っており，内３名全員が活動を広域展開する。M.I 氏の「DIY を広めたい」，Y.I 氏の「日本，世界の住処を自分の手でつくっていく力を養いたい[文 14)]」といった言葉からも DIY を普及することへの意志を確認できる。

②施工モデルの活動は，対象者 10 名中５名が行っており，５名中４名の活動は居住地近郊型の展開である。４名全員は、知人または知人の紹介によって顧客と出会うとも回答し、居住地近郊の身近な繋がりの中での活動が展開されていると推察される。

③運営モデルの活動は 10 名中４名が行っており，全員が，複数の物件の施工と運営を居住地近郊で行う。

2.3　第三の担い手の活動が始まるまでの経緯

次に，第三の担い手の活動が始まるまでの経緯について述べる。活動が始まるまでの DIY 経験や活動の始まり方の事例を**表 2-3** にまとめた。

2.3.1　第三の担い手の活動開始以前におけるDIY経験

対象者の多くが幼少期から青年期において，父・祖父

表 2-3　活動の始まり方

	ニーズ先行型			ビジョン先行型	
	対象者:S.T	対象者:H.I	対象者:Y.O	対象者:Y.H	対象者:T.U
活動開始前の経験↓	●大学で電子工学を学び，メーカーに就職後IT企業に転職。 ●オフグリッドな生活を試みたい考えから、2008年に千葉県君津市に土地を購入し，二拠点居住・DIYを開始 ●2016年に近隣で行われた断熱ワークショップ参加を契機にDIYer仲間の家や拠点のDIYを手伝い合う様に	●大学農学部在学中に，友人のシェアハウスを壁塗りを手伝い、こういうこと(DIY)をしても良いのだと知った ●大学院後は広告ベンチャーに就職 ●2006年に退職後，仲間と都内に古い家を借り住居兼アトリエへの改修を開始	●中高生でバイクカスタムを始めた ●自動車整備専門学校で学んだ後自動車メーカーで板金塗装工に ●マニュアル通りの作業にやりがいを見出せず，好きなことをやろうと2007年に古着とカフェの店を開業 ●内装はほぼ全てDIYで行い，溶接に初挑戦し鉄製什器を製作	●幼少期に自分の部屋の改装も一緒にDIYした祖父の影響で，ものづくりをして生きていきたいと思った ●外国語大学を卒業後，家具メーカーで海外営業の仕事を始めるも、ものづくりができず悩み，退職 ●空き家の活用をテーマとする地域おこし協力隊の存在に応募	●幼少期には父親の日曜大工を手伝い，作ることを身近に感じた ●大学で経済を学びITベンチャーを起業。会社勤務も経験後、雇われない生き方をしたいと思い2011年に不動産投資の副業を開始 ●投資物件の1Fを別荘としてDIYリノベした。ブログでDIYの情報発信
開始の契機	●2021年に急遽現場に入れなくなった大工から声がかかり，宿泊施設の改修工事を仕事として受けた	●2011年に知人の管理する施設が水害で損傷。有料の床貼りワークショップをやってみてはと提案を受け実施	●2011年頃から店の顧客から什器製作や内装の一部をお願いされる様になった	●2016年に佐賀県内に着任後すぐに民家をコミュニティスペースにリノベするセルフリノベを開始	●コミュニティのある賃貸を作りたいと思い，2015年に旧公務員宿舎を購入しDIY賃貸への改修を開始

のDIY手伝いや高校での実習授業といった，ものづくりへの興味のきっかけとなる原体験を持つ。また全員が，第三の担い手の活動開始以前に，自宅や知人宅，職場等でリノベーションに関わるDIYを複数回経験していた。

2.3.2　第三の担い手の活動の始まり方

第三の担い手の活動の始まり方には，「ニーズ先行」と「ビジョン先行」の２つの傾向が見られた。

「ニーズ先行」とは，DIY を取り組む内に，他者から頼まれる状況が生まれ，施工や指導に対して対価を受け取る様になるケースである。例えば，Y.O 氏は車の板金塗装工を辞めた後，カフェ兼古着屋の店舗を開業するにあたり内装や什器製作を全て DIY で行った。開業後４年程経った頃から，店の客から店舗にある様なものを作って欲しいと声をかけられる様になり，什器製作と内装工事を仕事として受ける様になった。この他にも，自宅や知人宅での DIY 経験を重ねる中，急用が入った知り合いの大工から声がかり，ピンチヒッターとして内装工事等を受ける様になった S.T 氏の事例等がある。

「ビジョン先行」とは，他者からのニーズよりも先に，DIY が活動の一部に含まれる取り組みを行うビジョンを持ち，活動を始めるケースである。例えば，Y.H 氏は家具メーカーの海外営業職を辞職後，祖父との日曜大工経験によって幼い頃から抱いてきた「ものづくりをして生きていきたい」という気持ちを実現させるべく，地域おこし協力隊に着任し，空き家のセルフリノベーションを開始した。この他にも，コミュニティのある賃貸住宅を作りたい思いから築古物件を買い上げ，DIYer 仲間と共に DIY 賃貸住宅のリノベーション工事を始めた T.U 氏の事例等がある。

2.4　第三の担い手の技能習得

2.4.1　技能習得の経緯

次に対象者の技能習得について述べる。技能習得の経緯として，「現場を共にした職人からの習得」「WEB や書籍などの閲覧を通じた習得」「ワークショップ参加による習得」の３つが特に多く言及された。

「現場を共にした職人からの習得」については，対象者 10 名中９名が言及した。具体的な学び方として，分からないことを職人に聞いてアドバイスを貰う，職人が使う道具や資材を真似る，職人の動きを見て後から真似てみる等の方法が挙げられた。直接教えてもらうだけでなく，同じ場に居ることで，職人の仕事が「見える」ということが学習に繋がることが示唆された[注2)]。

「WEB や書籍などの閲覧を通じた習得」については，対象者全員が言及した。WEB 動画の閲覧は，動きを見られるため学びやすいという意見がある一方で，知識がある程度つくと，知りたい情報に辿り着くのに時間がかかるので見ないという意見もあった。また，WEB ブラウザーでの画像検索や，ノウハウが書かれたブログを見つけるといった方法も聞かれた。書籍については，施工ノウハウが学べる本や雑誌の他に，デザインの参考となる専門誌から情報を得るとの声が挙げられた。

「ワークショップ参加による習得」については，対象者 10 名中７名が経験していた。ワークショップ参加の効果として，道具や材料を含めた施工方法の学習の他に，DIYer 仲間との出会いが挙げられた。ワークショップ終了後も DIYer 仲間と互いの現場で協働し，実践を通じて学び合う関係性が生まれるケースが複数見られた。

このように，対象の第三の担い手は，学校教育や職場での訓練とは異なる，インフォーマルな学習機会の組み合わせによって技能を習得していた。学習機会は，偶然の出会いや現場での必要性などによって左右され，結果として第三者の担い手が有する技能には大きな個人差が生まれると考えられる。

2.4.2　今後の技能習得の意向

今後の技能習得の意向についての質問に対し，対象者 10 名中９名が技能習得の意向があると回答し，現在有する技能の向上または新たな技能の習得の二種類が聞かれた。現在有する技能の向上として，「大工の様な正しい技術を学びたい」「左官技術を伸ばしたい」「CNC ルーターを使いこなしたい」といった意向が挙げられた。新たな技能の習得としては，「クロスを貼る技術を学びたい」「電気工事の資格を取りたい」といった意向が挙げられた。

2.5　活動の悩み・課題

第三の担い手の活動を続ける上で感じる悩み・課題については，工事マネジメントに関するものが多く聞かれた。例えば，「段取りがうまくいかず，工期が押してしまう」「自分のキャパを理解して，もっと仕事を人に振りたい」「ワークショップで素人参加があるときのクオリティコントロールが難しい」等である。この他にも，体力の維持や DIYer の地位向上，DIY サポートができる人を増やしたいといった課題が挙げられた。

3.　第三の担い手にまつわる関係性と活動の特徴

3.1　調査対象およびインタビュー調査の概要

3.1.1　調査対象の抽出

第３章は，第２章におけるインタビュー対象者の活動の中から２事例を抽出し，各活動に関わるステークホルダーへの半構造化インタビューを通して，第三の担い手を成立させる人や物の関係性と，そこから生まれる活動の特徴について考察する。

調査対象の抽出は，2.2 における第三の担い手としての活動形態の分析を基に行った。まず，特定の地域にお

ける活動では，当事者間の関係や環境について把握しやすいと考えられるため，2.2.4 における活動展開が「居住地近郊型」の事例を抽出した。その上で，2.2.1 における業務形態が「施工モデル」および「運営モデル」の事例から１事例ずつ抽出した。また，インタビュー調査および現地見学を行うにあたって移動しやすい距離にあること，第三の担い手と当委員との関係が既にある程度構築されていることも考慮した。その結果，千葉県富津市および周辺地域における Y.S 氏の事例（業務形態：「施工モデル」），および千葉県松戸市における Y.A 氏の事例（業務形態：「運営モデル」）を調査対象に選定した。

3.1.2　半構造化インタビュー調査の概要

半構造化インタビュー調査の対象者は，第３章におけるインタビューおよび第三の担い手への追加インタビューで，話題に上がった人物から選定した。こうして各事例６名ずつを対象に，2023 年４月～９月に半構造化インタビューを行った。調査の概要は**表 3-1** の通りである。

インタビューは，①当該第三の担い手とステークホルダーの関係性②当該第三の担い手による活動の特徴を軸に進めた。主査と委員は，インタビュー中および直後に内容を記したフィールドノートを作成し，調査の一次資料とした。また，第３章のインタビュー調査で作成したフィールドノートも参照した。②については当該第三の担い手同行の下，現地見学も行った。

表 3-1　インタビュー調査概要

		属性及び第三の担い手との関係	調査日・形式
富津市及び周辺地域	A	施主	23/4/24オンライン, 23/6/15対面(現地)
	B	施主	23/5/8オンライン, 23/6/15対面(現地)
	C	施工仲間	23/5/1オンライン
	D	施工仲間, 材木屋	23/6/15対面(現地)
	E	地域活動NPO代表	23/5/2オンライン
	F	設計士	23/7/26オンライン
松戸市Aハイツ	G	Aハイツ入居者	23/7/31対面(現地)
	H,I	Aハイツ元入居者	23/9/16オンライン
	J	父, 大家業の同僚	23/5/13対面(現地)
	K	妻, 大家業の同僚	23/5/13対面(現地)
	L	不動産会社代表	23/9/6対面(現地)

3.2　富津市および周辺地域における Y.S 氏の事例調査

3.2.1　対象地域の概要

Y.S 氏は富津市および周辺地域において，主に住宅や店舗のリノベーションを行う。富津市および周辺地域とは，主に富津市，南房総市，館山市，鋸南町を指す。当該地域は千葉県の房総半島南西部に位置し，海に面する一方，房総丘陵に覆われた中山間地域である[文 15)]。房総半島西岸には JR 内房線が通り，館山自動車道および富津館山道路が東京湾アクアラインと接続している。

当該地域は東京都心からアクセスしやすく，南房総市を中心に二地域居住[注 3)]の先進地として知られる。南房総市では行政が二地域居住の整備をするだけでなく，E 氏が代表を務める NPO 法人がその推進に寄与している[文 16)]。

3.2.2　Y.S 氏とステークホルダーの関係性

まず，本調査で把握した Y.S 氏とステークホルダーの関係の概要を**図 3-1** のように整理した。これを基に，Y.S 氏の活動がステークホルダーとのどのような関係性によって成立しているかを説明する。

Y.S 氏の活動は，DIY を趣味とする 10 人弱のグループを基盤とする。グループ内には Y.S 氏の他にも，C 氏を初め，第三の担い手が存在する。DIY グループでは，基本はほとんどのメンバーが各自で現場を持ちながら，人手が必要な際にはグループ内に声を掛ける連携体制が敷かれている。例えば，B 氏が購入した古民家に柱を追加する工事を行った際，DIY グループのメンバーと知り合いの大工を呼んで既存梁をジャッキアップしたという。複数の仲間が集まって施工することについて，B 氏は「*家の中の色々な場所を見るたびに，皆で家を育て上げた良い思い出が浮かぶ*」，D 氏は「*作業後の宴会で皆でああだこうだ言うことや，楽しそうに作業している人たちを見るのが楽しい*」と語っており，DIY グループの連携体制は互助の意識だけでなく，協同による喜びや達成感によって成り立っていると推察される。また，DIY グループでは再利用可能な廃材を回収することが多い。廃材の内容と回収先の情報は SNS で共有され，主に解体現場や廃業した店舗，建材屋へ回収しに行くという。廃材は長期的に保管されることが多く，Y.S 氏は自宅敷地内に自作

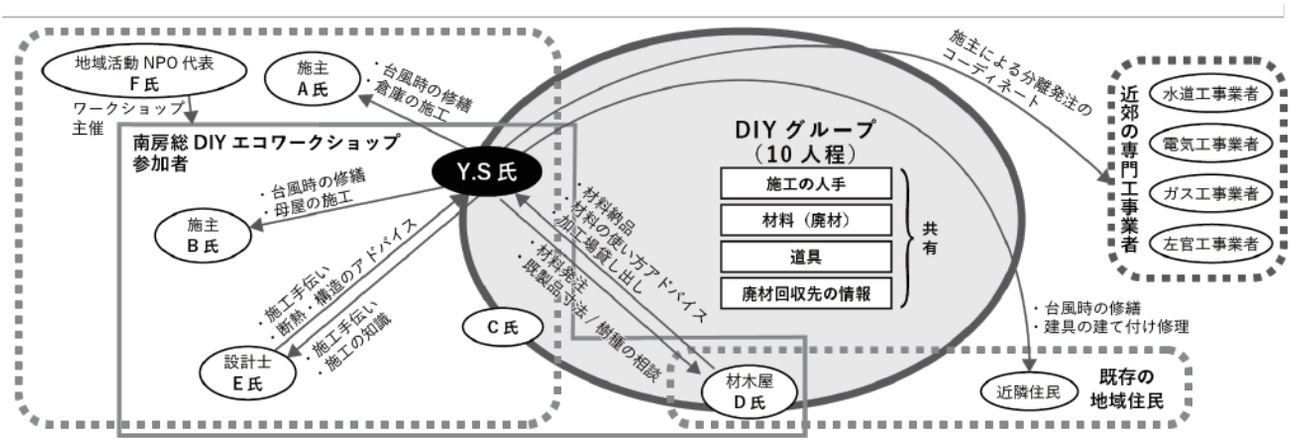

図3-1　Y.S氏とステークホルダーの関係概要図

の保管倉庫を所有している。

DIY グループのメンバーは，D 氏を除き，二地域居住者または移住者である。DIY グループの結成は，E 氏の代表する NPO 法人が 2016 年に主催した「南房総 DIY エコワークショップ」がきっかけであり，個別に DIY を趣味としていた二地域居住者や移住者が連携する契機となった。

施主についても，ほとんどが二地域居住者または移住者の知人である。A 氏・B 氏は移住者であり，ともに Y.S 氏の施主となる以前からその活動を知る友人である。Y.S 氏の施工について，A 氏は「*Y.S 氏ならきれいに仕上げてくると思った*」「*人となりも分かる*」，B 氏は「*DIY グループのメンバーは皆情が厚い*」「*人生の先輩でもあり，(略) 尊敬できる*」と語っており，Y.S 氏や DIY グループへの信頼が窺える。A 氏は「*Y.S 氏は希望を鵜呑みにするわけではないが，一刀両断もしない*」とも語っており，A 氏・B 氏ともに Y.S 氏と率直な意見を交わし，相互に譲歩しながら施工を進めた様子が見受けられた。

一方，日常時における既存住民との関わりは，自治会の参加や挨拶程度に留まるものの，災害等の有事や建物に関する困り事がある際は，手助けする関係が築かれている。2019 年に房総半島が大型台風の被害に遭った際には，Y.S 氏は近隣の既存住民からも修繕の相談を受けるようになったという。

Y.S 氏の活動には，材木屋の D 氏や設計士の F 氏といった建築分野の専門家も関係する。DIY グループの一員でもある D 氏は，材料を納品するだけでなく，既製品寸法や材種の相談を受ける，材料の使い方を助言する，加工場を貸すといったサポートも行う。二地域居住者でもある F 氏は，構造と断熱について助言することが多いが，Y.S 氏から施工について教わることも多く，Y.S 氏とは「*持ちつ持たれつの関係*」であると表した。

3.2.3　Y.S 氏による活動の特徴

次に，本調査で得られた Y.S 氏による活動の特徴を**表 3-2** のように整理した。

Y.S 氏の施工に関して多く語られたのが，①廃材の活用と施工の工夫である。Y.S 氏の案件は低予算であることが多く，建具から木材，照明まで様々な廃材を活用している。中には廃材を本来とは異なる使い方で用いることもある。例えば A 氏のカフェ兼加工場では，土壁の下地として，余った鶏小屋のネットをラス網に代用している（**写真 3-1(a)**）。加工場を仕切る引き戸は，２枚の折れを継いだものである（**写真 3-1(b)**）。このような柔軟性が Y.S 氏の施工を特徴付けており，Y.S 氏自身も工夫を楽しむ様子が窺えた。

Y.S 氏の活動は②プロとの棲み分けができているという話も聞かれた。Y.S 氏の元に舞い込む案件は，劣悪な状態の空き家改修のような採算が取れない工事や，些細な補修等が多く，一般にプロの職人が請け負うものとは異なる性質の案件を担っていると考えられる。

また，Y.S 氏と施主の双方から，Y.S 氏の③施主との対等な立場を優先する信条について語られた。Y.S 氏の活動は，「*あくまでも自分がやりたいことをやる*」といった言葉に象徴されるように，利益や合理性よりも，施工の楽しさや施主への良心を動機とする。例えば，Y.S 氏は A 氏の案件を低予算で施工するのと交換に，A 氏には掃除等の施工に必要な雑務を可能な限り行なってもらったという。また，B 氏の自宅改修は，B 氏が当時住み始めた古民家の状態の悪さを危惧した Y.S 氏や C 氏からの提案が発端であった。このように，低予算な依頼の安請け合いも利益を優先した仕事もせず，施主とはあくまで対等であるという道義に基づいて活動する姿勢が見られた。

表3-2　Y.S氏の活動の特徴（括弧内は発言者）

①廃材の活用と施工の工夫
・材料は基本的に解体現場から出たもの，工務店から要らない材を譲り受けたものを使う（Y.S氏） ・解体は宝探しのようでうきうきする（Y.S氏） ・「Y.S氏式」という感じ（A氏） ・廃材と新しい材を両方使っているので，馴染むように工夫してくれているし，そこにプラスαの一味を加えてくれている（A氏） ・玄関扉や窓，勝手口は廃材を利用した（B氏） ・拾った流木を電気スタンドやトイレの鍵等にリメイクしてくれた（B氏） ・進んでいる現場の必要な箇所にぴったり合う廃材が偶然見つかった場合のみ使うことが出来ると思う（C氏） ・プロと違って考えが柔軟だと思う（D氏） ・体系的ではなく即興で決めて作業を進めていく（E氏） ・柔軟性がY.S氏の真骨頂だと思う，僕たちは時に正統的すぎると思う（F氏）
②プロとの棲み分け
・1mmの誤差を気にせず作業が進むことを優先したい，精度を求めるなら大工に頼めば良いと考えている（Y.S氏） ・大工に頼む程ではない，頼めない仕事が来ることが多い（Y.S氏） ・作業内容と予算の割が合わず，新築にした方が採算の良い改修がほとんど（D氏） ・お金がない人たちの元へ行くことが多いので，本職の大工との棲み分けができるなと思った（E氏）
③施主との対等な立場を優先する信条
・仕事という感覚はあまりない（Y.S氏） ・あくまでも自分がやりたいことをやる，お客さんのどうしてもやりたいことがあればプロに頼んでと言っている（Y.S氏） ・仕上げは基本的にお客さん（Y.S氏） ・商売としてやっていないのでお金のない人には安く設定するが，その分自分で出来ることはやってねというスタンス（Y.S氏） ・「安く仕上がるからY.Sさんでいいや」は断る（Y.S氏） ・Y.S氏がいなくても分かる範囲の材料の準備や掃き掃除，作業台の設置，ゴミ出し，道具運び，空気の入れ替え，次にやることを聞いて作業場所の確保等をした（A氏） ・準備などに時間がかかるのは勿体無い，時間は有限だとY.S氏によく言われた（A氏） ・風呂のコンクリート仕上げ，断熱用の籾殻作り，縁側の床張り等の他，材料の受け渡しや押さえる等のサポートをした（B氏）

写真3-1　廃材を活用した施工（a：A氏提供，b:Y.S氏提供）

3.3　松戸市Aハイツにおける Y.A 氏の事例調査

3.3.1　対象地域と物件の概要

Y.A 氏は，大家として「A ハイツ」の空室のリノベーションや修繕を自ら行う。A ハイツは，1975 年に竣工した地下１階，地上６階，部屋数 60 戸の賃貸マンションである。地上１階はテナントとなっており，飲食店や本屋の他，A ハイツが運営するレンタルスペースも入居する。

A ハイツの所在する松戸市は，千葉県北西部に位置し，江戸川を挟んで埼玉県と東京都に隣接する。市内には６本の鉄道が通り，首都圏の住宅都市として機能する[文17)]。

3.3.2　Y.A 氏とステークホルダーの関係性

まず，本調査で把握した Y.A 氏とステークホルダーの関係の概要を**図 3-2** のように整理した。これを基に，Y.A 氏の活動がステークホルダーとのどのような関係性によって成立しているかを説明する。

A ハイツは，役員である Y.A 氏の他，二代目社長である父の J 氏，母，姉，妻の K 氏が組織する株式会社 A が経営する。同社は A ハイツの他にも，松戸市内で３軒の賃貸集合住宅を経営している。Y.A 氏による空室のリノベーションは，Y.A 氏が同社に入社して３年程経った頃に始めたものである。以前は自身で簡易な修繕を行なっていた J 氏は，Y.A 氏に人手が必要な際には施工を手伝っているという。当初は採算等の心配から Y.A 氏の活動に半ば反対していた J 氏だが，現在は「*業者に任せるよりも面白い部屋ができる*」と理解を示している。また K 氏は Y.A 氏の活動や同社の経営に対して客観的な視点を持ち，間取りや仕上げについて意見を求められることもある。K 氏の美的感覚が反映された内装や SNS 投稿は，A ハイツの求心力となっており，Y.A 氏は K 氏を「A ハイツの雰囲気担当」と表している。

Y.A 氏の施工は，松戸市内や近郊の専門工事業者と協働して行われている。主な業種は，資格が必要な水道・電気・ガスに加え，塗装・クロス貼り・建具であり，これらは決まった業者に依頼している。

また，Y.A 氏の活動は空室の施工完了後に入居者を募るため，基本的に施主が存在しない。しかし例外として，オーダーによるフルリノベーションを数部屋行ったことがあり，H 氏・I 氏夫婦はその内１部屋の入居者である。

大家としての Y.A 氏と入居者の間には，管理業務における大家と入居者の形式上の関係を超えた信頼関係があると言える。H 氏・I 氏は「*大家さんの人柄が良すぎて，安心できた*」と語り，「*J 氏とも会ったら必ずお話ししていた*」「*K 氏とは今でも Instagram の DM でやり取りする*」といったように，Y.A 氏の他に J 氏や K 氏とも親しい関係を築いていた。また，G 氏は「*程よい距離感で関わってくれていると感じる，それがちょうど良い*」「*何かあるときに頼れる頼もしさがある*」と語り，Y.A 氏が入居者に気を配る様子が窺えた。

また，A ハイツの入居者は，Y.A 氏がリノベーションを始めてから増加している。最近は A ハイツの SNS を見て入居を希望する人も多い。入居者の属性は，在宅勤務可能なライターや近隣の店舗で働く人が目立ち，30～40 代の単身者や二人暮らしが多いという。G 氏や H 氏・I 氏からは，A ハイツで年に数回開催される餅つきや七夕飾り，マルシェ，バーベキューといったイベントが入居者同士の交流の場となっているとの話が聞かれた。

A ハイツの不動産仲介については，L 氏が代表を務める不動産会社に委任している。この不動産会社は，松戸市を中心にまちづくり事業も行い，現在は A ハイツのテナントに入居している。

A ハイツの入居者やテナントの充実は，周辺地域にも影響を及ぼしている。L 氏の元には，近隣の物件所有者から「A ハイツのような場所にしたい」との相談があり，新たな店舗の入居が実現したという。実際に，G 氏は A ハイツの周辺に新たな店舗や若者が増えたと感じており，A ハイツの活性化が地域に訴求していると考えられる。

3.3.3　Y.A 氏による活動の特徴

次に，本調査で得られた Y.A 氏による活動の特徴を**表 3-3** のように整理した。

入居者からは，Y.A 氏による①入居者の DIY の補助について語られた。3.3.2 で述べたように，Y.A 氏は大家として入居者と信頼関係を築いたことで，第三の担い手と

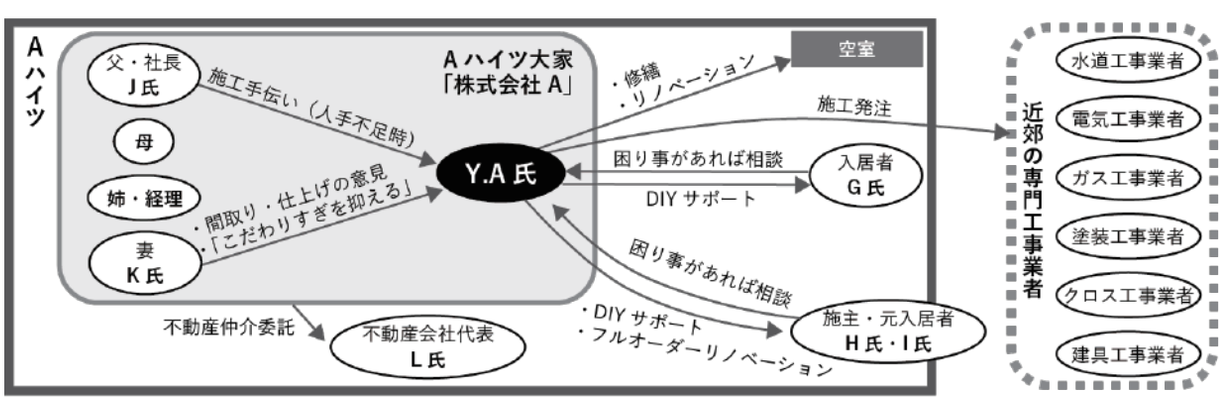

図3-2　Y.A氏とステークホルダーの関係概要図

しても入居者の頼りにされ，一部作業を手伝う，電動工具を貸すといったDIYの補助を行っていた。

また，Y.A 氏の活動は②所有物件における自己判断による施工によって進められる。Y.A 氏の活動はクライアントワークではなく，全て自社の物件で行われるため，施主の要望に応える職責が発生せず，デザインから施工までほとんどの決定権をY.A氏やK氏が持つ。そのため，新たな施工方法に挑戦する，部屋ごとにデザインを変える，ディテールにこだわるといった，Y.A 氏や K 氏の判断による自由な活動が可能であると言える。

一方で，③時間・労力・費用のバランスに対する課題も聞かれた。J 氏や K 氏は，Y.A 氏による施工でできた空間に対して好意的である反面，想定される家賃帯と人件費や施工費用の採算が合わなくなることを懸念していた。築古物件であることと②所有物件における自由度の高さがあることが，このような課題を生むと考えられる。

表3-3　Y.S氏の活動の特徴（括弧内は発言者）

①入居者のDIYに対する補助
・DIY可能だったので壁を白に塗装したが，その際に道具を借りたり，半端に余った塗料を数種類もらったりした（G氏） ・タオル掛けや棚を壁に取り付けたいと相談し，ビスを打ってもらった（G氏） ・サンダーを借りたことがある（H氏・I氏） ・下駄箱をDIYする際に，板を切ってもらった（H氏・I氏） ・スノーボードの手入れをするのに粉が舞うので，Y.A氏の作業部屋や駐車場の端を作業するのに貸してもらった（H氏）
②所有物件における自己判断による施工
・ディテールのこだわりがあり，手間暇かかっている分，魅力があると思う（J氏） ・持ち家だから自由にできて文句を言われないという点も，新しいことにチャレンジする上で大いに影響していると思う（L氏） ・同じ部屋がなく，Y.A氏本人が施工する上で飽きないようにしていると思う（L氏） ・地下の倉庫や駐車場で材料の保管と加工を行っている（Y.A氏）
③時間・労力・費用のバランスに対する課題
・10人がなんとなく住める部屋より，10人中2，3人が好む部屋の方が面白いが，仕事の追いつきとのバランスが難しい（J氏） ・費用とかける時間や労力のバランスを考えるのが苦手なY.A氏の「こだわりすぎを抑える役」をしている（K氏） ・家賃帯に合った施工をしてほしい（K氏） ・アイランドキッチンを希望したが予算の都合でY.A氏から壁沿いのキッチンを提案された，その後やはり空間として良くなるのでアイランドキッチンにしましょうと再提案があった（H氏・I氏）

3.4　考察

表 3-2-③や表 3-3-②から，対象者２名に共通する特性として，施主からの依頼によって発生する対価と職責に制約された，一般的な建築施工の枠組みから外れて活動することの可能性が見られた。さらにその結果として表 3-2-①や表 3-3-②で言及されたような非従来的な工法や，製作物や空間の独創性や工夫が生まれると言える。

上述の一般的な建築施工の枠組みから外れた活動には，第三の担い手が施主や入居者と請負人の形式的な関係に留まらない親しい人間関係を築き，施主や入居者から信頼を得ることが欠かせないと考えられる。また，第三の担い手の活動には，施主や入居者との人間関係の築き方の他にも，DIY 仲間との連携や低予算な仕事を受ける場合の施主への対応，といった施工の技能とは異なった「広義の技能」が重要であると言える。

また，対象者２名の事例から，第三の担い手が特定の地域で活動することで，その地域における災害レジリエンスや活性化，空き家再生等に貢献する可能性が示された。しかし一方で，人間関係の築き方等の「広義の技能」は非常に属人的である。そのため，第三の担い手が特定の地域コミュニティにおいて重要な役割を担うようになった場合，後継者の育成が課題として見えた。

4. 職人への第三の担い手に関するインタビュー調査

4.1　調査の概要

第４章では，職人への半構造化インタビューを通して，第三の担い手の可能性と課題に関する職人の見解を把握する。対象者は主査の知人から，第三の担い手と同じ現場で仕事をした経験の多い職人２名を選定した（表 4-1）。

表4-1　インタビュー概要

	性別	職種	職人歴	活動拠点	調査日
K.O	男性	大工	29年	千葉県鴨川市	23/9/5オンライン
M.K	女性	左官	18年	広島県廿日市	23/9/7オンライン

4.2　職人から見た第三の担い手の可能性と課題

本調査を通じて得られた第三の担い手の可能性と課題に関する職人の見解は，以下の通りである。

表4-2　第三の担い手の可能性と課題

①可能性
・予算がない人も工事を依頼しやすい。 ・お客さんにとって感覚が近い存在だと思う。 ・ちょっとした工事を依頼しやすい存在である。 ・災害時など職人だけでは人手が足りない時に力になる。
②課題
・技能，知識，経験，安全への認識が不足している。 ・少しの経験で自分はできると過信する場合がある。 ・不具合があった時誰が責任を取るのかが不明である。 ・工期が長引くケースも見られる。 ・見積もりが甘く赤字の場合もあると思われる

4.3　考察

プロの職人では仕事として受けづらい低予算または小規模な工事が第三の担い手に依頼される実態がここでも指摘された。左官職人である M.K 氏は「金銭面で合わない時に，第三の担い手を依頼主に紹介することがある」とも語り，予算や工事規模によって仕事の棲み分けがなされることが，肯定的に捉えられていることが分かった。また，災害時に第三の担い手の存在が重宝され得るという指摘は，大工の K.O 氏が令和元年房総半島台風で経験した復旧作業を通じた気づきであり，第三の担い手が地域社会で担い得る重要な役割を示唆している。

プロの職人から見た課題として，第三の担い手の技能，安全，責任に対する懸念が挙げられた。K.O 氏は，第三の担い手が最低限の技能と知識を学べる場が必要であるとも述べた。一方これらの課題は，第三の担い手自身が自らの活動に対して抱く悩みや課題としては言及されず，第三の担い手と職人の間で，認識に明らかな違いが生じた。

5.　米国ベイエリアにおける先行事例調査

5.1　調査の方法と目的

DIY が一般的に浸透してきた米国においては,「第三の担い手」と捉えられる職能が,日本よりも早期に萌芽し,より広く普及している可能性がある。この仮説の下，米国における第三の担い手の実態を捉え，職能の可能性と課題，職能成立の社会的背景を考察することを目的に調査を行った。

本調査では，米国の中でも，特にサンフランシスコ・ベイエリアを中心にカリフォルニア州北部を対象地とし，調査を行った。当エリアに着目した理由は，1960 年代後半からベイエリアを中心に起こったカウンターカルチャーが，DIY 的なライフスタイルや昨今のメイカームーブメントを形作った契機となり，現在に至るまでその影響が残ると考えられ，第三の担い手が成立してきた可能性が高いと考えられるからである。

行った調査は，文献調査，施設視察，インタビュー調査である。まずは文献調査と視察を通じて，ベイエリアの DIY やビルダーに関する情報収集を行った。次に，知人の紹介等を通じて，第三の担い手と捉えられる可能性のあるビルダーにインタビューを行った。

5.2　米国ベイエリアにおける DIY 発展の背景

(1) カウンターカルチャーとホールアースカタログ

ベイエリアは，昨今のメイカームーブメントの中心地の一つとしても知られるが,DIY 発展の背景として,1960 年代後半のカウンターカルチャーの興隆が挙げられる。政府や大企業に頼らない自給自足的な生活スタイルを追い求めた若者が米国各地からベイエリアに集結した。彼らを情報面で支えたのが，ホールアースカタログ(以下，WEC とする)であった。自給自足に必要な道具や知識へのアクセスを提供するカタログとして,1968 年から年 2 回発行され,発行部数 250 万部ものベストセラーとなった。誌中の Shelter チャプター等には，DIY による住居の修理や増改築やセルフビルドに必要な道具やノウハウが数多く掲載された[注 4)]。

Shelter チャプターの専任編集者は，ロイド・カーンという人物である。独学で大工技術を学び，大工を中心とした多能工として住宅などの建設に従事した[文 18)]。本研究で定義する第三の担い手に当たる人物である。その経験から「自分が持っている役に立つ情報を，誰にかに分け与えたい[文 19)]」という思想のもと WEC の編集と執筆を行った。毎号の情報収集には自身の経験だけでなく，読者からの情報提供も重要な役割を担った。DIY に取り組む当時の若者に絶大な影響力を持った WEC の根底には，個々が持つ知識や技能を他者と共有する「スキルシェア」の思想があったことが文献調査より明らかになった。

(2) 現在のベイエリアにおける DIY 土壌

ベイエリアには DIYer やビルダーを支える多様な施設が存在する。本調査では現地のホームセンターやランバーヤードの見学に加え，DIYer 向けの技能学習プログラムを提供する施設も視察した。

道具専門店 Hida tool には，ノミ，カンナ，ノコギリなどの高品質の刃物が数多く並ぶ。同店の現オーナーに聞き取り行ったところ，顧客の大半が DIYer であり，店内では工具の販売だけでなく，刃物の研ぎ方や使い方の講習も行うことがあることが聞かれた。

バークレー郊外に位置する Girls Garage は，10 代の女性が建設技能を学ぶためのワークショップ拠点である。運営を行う NPO 創業者の P.E 氏に聞き取りを行ったところ，ここで技能を学んだ女学生の約半数が設計・エンジニアリング・職人など建設の道を進むことが分かった。

施設視察を通じて，誰でも建設に必要な道具，資材，スキルにアクセスできる場の存在を確認した。

5.3　米国における第三の担い手の実態

次に米国カリフォルニア州北部で行った聞き取り調査について述べる。まず、第三の担い手の定義に該当するビルダー２名を対象に、活動と来歴について非構造化インタビューを行なった(**表 5-1**)。

表 5-1　米国調査 インタビュー対象

対象者	P.M(男性)	S.R(女性)
工事種	大工中心の多能工	左官中心の多能工
活動開始年	1973年	2002年
活動拠点	カリフォルニア州バークレー市	カリフォルニア州ポッターバレー
調査日	22/8/17(対象者自宅) 23/7/29(オンライン)	22/8/14(対象者自宅)

(1)1970年代初頭の第三の担い手の活動と来歴

P.M 氏は 1970 年代初頭から 25 年間ビルダーとして活動し，現在は現役を退いた人物である。同氏は，カウンターカルチャー期終盤である 1973 年にロースクールを退学し，ミネソタ州からバークレー市に移り住み独学でビルダーとしての仕事を始めた。1988 年に職人を辞め弁護士に転職するまでに，３件の新築木造住宅と多くのリノベーションや家具製作の仕事を手がけた。専門工として細分化された工事だけを行うよりも，広い範囲の仕事を自由にやりたい意向から，電気と配管を除く工事のほとんどを自ら担う多能工として働いた。職人としての技能は，自分や仲間の現場で実践を通じて失敗を重ねながら学んだ。ビルダー仲間には，独学でドラフトマンになった弟，独学で大工になった兄や，文学部博士課程を退学して大工になった友人もいた。インターネットのない当時，情報収集の上でホールアースカタログは必読書だった。70 歳を越えた現在は弁護士の職も退職し，息子と孫と共に，自宅の庭に小屋を建設している。

(2) 現代における第三の担い手の活動と来歴

S.R 氏は 2000 年代に職人になり現在もビルダーとして

活動中の人物である。現在,北カリフォルニアを拠点に,現在も左官を中心とした多能工として活動している。同氏は大学でアートを学んだ後，土壁に興味を持ちビルダーの手伝いを数ヶ月行った。その後興味のあるプロジェクトにボランティアやパートタイムジョブで工事に参加して，技能の基礎を学んだ。現在は土などの自然素材を使った建築の施工や近隣の住宅の左官補修，ワークショップを通じて技能教育に従事している。同氏が指導するワークショップ等への参加者には，左官の仕事への入職に興味があることを理由に参加する層がほぼ必ず含まれ,その様な参加者には仲間が主催するワークショップや工事手伝いの機会を紹介することが多い。

(3)第三の担い手の可能性と課題

次に,上記２名に、第三の担い手との協働経験の豊富な職人であるY.M氏[注5)]を加えた３名から、第三の担い手の課題と可能性について聞き取りを行い，以下の要点の回答が得られた。

表5-2　第三の担い手の可能性と課題(米国調査)

①可能性
•建設分野の仕事への参入障壁が低い •従来の方法に捉われない工法を探求できる •プロが手を出さない様なプロジェクトを解決に導く可能性がある •他者との協力や相談が必要な分,共同で作り出す喜びとコミュニティを得られる
②課題
•工期が長引く可能性がある •技能レベルがバラバラで低いままの人も多い •成果物が低品質または危険である可能性がある •自力で試行錯誤を重ねることはストレスや不安に繋がり得る •高い技能を習得してもすぐに辞めてしまう場合も多い

(4)考察

インタビューを通じて,多能工的な働き方やワークショップを通じた技能学習など,日本で活動する第三の担い手と共通する特性が確認された。

工期の長期化や成果物の低品質に関する課題は，4.2でも同様の指摘があった。この課題は、米国の建設業におけるノンユニオンワーカー[注6)]について「職歴が当てにならないケースがあり，こちらで教育する必要がある[文20)]」と指摘される様に，米国においては既に顕在化していると推察される。

また「建設分野の仕事への参入障壁が低い」という点についてY.M氏は、S.R氏と同様に、主催するワークショップに左官への入職希望者が参加することや、自身もワークショップ参加をきっかけに左官を始めたと述べた。ワークショップ等のスキルシェアの場が，技能学習を提供するだけでなく，ビルダーとして働き始めるための入り口として機能している可能性が示唆された。

5.4　小結

米国での調査を通じて，日本での実態調査を通じた考察に，２つの視点が加わった。

まず第三の担い手の職能成立の背景として，スキルシェアの思想とそれを実践する場の重要性が浮かび上がった。もう一点は，第三の担い手が従来の技能習得を経ていないことが，工期の長期化や低品質といった課題だけでなく，第三の担い手特有の可能性にもつながるという視点である。具体的な可能性として、非従来的な工法に探究にチャレンジできるなどの可能性が言及された。

6.　結論

6.1　得られた知見

以上より本研究で明らかになった点を以下にまとめる。

①第三の担い手の活動

第三の担い手が行う工事は主に，住宅用途もしくは商業用途のリノベーションである。業務には，自ら行う施工と，施工に参加するDIYerのサポートの二種類があり対価の受け取り方によって，施工モデル，指導モデル，運営モデルに大別できる。また第三の担い手の活動は，他の仕事と兼業して行われるケースが多く見られた。

②第三の担い手の技能

第三の担い手は，多能工として幅広い工事を横断的に担う傾向にあり，技能の不足を，プロの職人との連携によって補う実態が示唆された。

施工技能は,同じ現場に居る職人の仕事を見る,WEBや書籍を閲覧するなど，インフォーマルな学習機会の組み合わせによって習得する実態が明らかになった。また第三の担い手の業務には，施工技能だけでなく，形式的な関係に留まらない人間関係の構築や，非従来的な工法を柔軟に考案するなど，広義の技能が求められると考えられる。よって，第三の担い手が有する技能は，極めて属人的である。そのため，第三の担い手が特定の地域において重要な役割を担うようになった場合，後継者の育成が課題として見えた。

③第三の担い手の役割

リノベーション工事の中には予算や工事規模などの事情から、プロの職人へ依頼しづらく、職人にとっても仕事として取り組みづらい領域が存在し，それらの顧客ニーズの一部を第三の担い手が担う構図が示唆された。また第三の担い手が特定の地域で活動することで，災害レジリエンスの向上，空き家再生を通じた活性化等に貢献する可能性が示された。

6.2　今後の課題

本研究を通じて，第三の担い手の実態と，建設業および地域コミュニティの中で，第三の担い手が持つ役割の骨格が示唆されたと考えられる。一方，第三の担い手が有する技能の評価や，技能や知識の不足を原因とする瑕疵や安全性，責任などに関する具体的な問題まで指摘することができなかった。

第三の担い手に求められる特有のニーズや関係性を踏

まえた上で，第三の担い手に求められる「広義の技能」とリスクを，高い解像度で検証することは次の課題である。その上で，第三の担い手が最低限身につけるべき技能と知識が何で，社会にどんな学習機会を生み出す必要があるのかを考えていきたい。

技能の学習機会の創出を考える上で，米国ベイエリアで見られた「スキルシェア」の思想と場がヒントになると考えられる。ワークショップなどのスキルシェアの場は，日本においても見られ始めているが，さらに一般化されることが期待される。技能者が持つ高度なスキルを，プロだけで排他的に継承するのではなく，職能の境界を越えてインクルーシブにシェアする姿勢と実践が，新たな担い手を生み出す大きな力になるのではないだろうか。このビジョンは，世界に誇る職人技術を有する日本の建設産業だからこそより鮮明に描けるものであると考える。

全国の空き家問題や建設技能者の不足が深刻化する中で，第三の担い手は重要度を増してくると推測される。状況の把握と提言に留まることなく，社会実装まで責任感を持って取り組んでいきたい。

＜謝辞＞

ヒアリング調査にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。菅原祐二氏，赤城芳博氏には，幾度に渡るヒアリングと知人のご紹介など，大変なご協力を賜りました。また，東京大学の権藤智之先生には研究に対する貴重なご助言を頂きました。心より感謝申し上げます。

＜注＞

1) 主査と委員が所属するつみき設計施工社は，2010 年より施主参加型の施工やワークショップに取り組んでおり，多数の DIYer との交友関係がある中で，施工を仕事にする DIYer の話が複数聞かれるようになった。
2) このことは、ウェンガーらが参考文献 21)で提唱する「状況学習」が工事現場においても生じている事を示唆しており、建設技能学習の在り方を考える上で重要である。
3) 都市部の住民が地方部にも生活拠点を持ち，２つの拠点を往復するライフスタイルのこと。
4) WEC の中で最も販売部数の多い参考文献 22)の，P.84-p.110 が Shelter チャプターに当たる。内容の一例としてローコストな建築技術を集めた書籍が，R・カーンの推薦文や， 壁の納まりスケッチの引用と共に紹介されている。
5) Y.M 氏は，左官を中心とした多能工である。左官会社での勤務経験があるため第三の担い手には該当しないが、2008 年の活動開始以降、第三の担い手との工事現場での協働経験は豊富にある。2022 年 8 月 14 日に同氏の自宅(カリフォルニア州レッドバレー)にてヒアリングを行った。
6) ノンユニオンワーカーとは、ユニオン(労働組合)に属さない労働者を意味する。参考文献 22)P.17 によると、米国の建設就労者の約 17%がユニオンに加盟している。ユニオンが、加盟する労働者の教育訓練を担うことで、建設業側にとっては生産性と品質が、労働者側にとっては賃金を含めた労働環境が担保される。第三の担い手の定義に該当するビルダーは、その来歴を考慮すると、ノンユニオンワーカーに含まれると考えられる。

＜参考文献＞

1) 一般社団法人日本建設業連合会：建設業ハンドブック 2021，p.18，2021.11
2) 河野直：NOTE,DIY はいつ誰に流行ったのか？社会基本調査データから読み解く。 https://note.com/naokono/n/n2c7e239abb06 (2023.10.28 閲覧)
3) 松村秀一：ひらかれる建築 -「民主化」の作法,p.179,筑摩書房，2016.10
4) アルビン・トフラー：第三の波，pp.381～400,日本放送出版協会，1980.5
5) クリス・アンダーソン：MAKERS 21 世紀の産業革命が始まる，NHK 出版，2012.10
6) 建設通信新聞：【親子で伝える日本の大工仕事】ユーチューブチャンネル「大工の正やん」， https://www.kensetsunews.com/web-kan/738413 (2023.10.28 閲覧)
7) 蟹澤宏剛：専門工事業の従業者に関する考察，日本建築学会計画系論文集，69(583)，113-120，2004.9
8) 蟹澤宏剛，増田千次郎：住宅建築における大工技能の評価に関する研究-大工技能の作業研究および継手の強度試験に基づく考察-，住宅総合研究財団研究論文集，35，297-308，2009.
9) 野村裕子，蟹澤宏剛：現代の木造住宅生産における大工技能者に関する研究-大工技能者の処遇と育成システムに関する基礎的考察-，日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道），2013.8
10) 三原斉：多様化する左官技能者の育成モデルに関する考察-新しい建築技術技能教育の手法に関する研究その１-，日本建築学会環境系論文集，71(600)，75-82，2006.2
11) 大野隆司：DIY による住宅改修作業の可能性に関する調査研究，日本建築学会計画系論文集，64(517)，173-178，1999.3
12) 山崎古都子：住宅に関する「DIY」技術と住宅管理行動の相関性-住宅管理の社会的支援に関する研究（第１報）-，日本建築学会計画系論文集，65(534)，247-254，2000.8
13) 鈴木雅之，服部岑生，高柳英明，吉岡陽介，陶守奈津子：築年の古い公的賃貸集合住宅の DIY リフォームによる実践的研究，住宅総合研究財団研究論文集，33，2007
14) 全国床張り協会：同団体 WEB,名誉会長挨拶,2013.5, https://yukahatter.jp/statement (2023.10.28 閲覧)
15) 国土交通省：地方振興-南房総地域（千葉県）， https://www.mlit.go.jp/kokudoseisaku/chisei/kokudoseisaku_chisei_tk_000117.html (2023.10.28 閲覧)
16) 住吉康大：日本における「二地域居住」の実態と地域振興との関係性-千葉県南房総市および周辺地域を事例に-，地理学評論 Series A，94(5)，348-363，2021
17) 松戸市ミュージアム：松戸市の歴史，https://matsudo-digital-museum.jp/history/ (2023.10.28 閲覧)
18) Lloyd Kahn：Builders of the Pacific Coast,pp.252, Shelter Publications,2008.10
19) エディトリアルデパートメント：Spectator No.30 -ホール・アース・カタログ後編,pp.45 幻冬舎出版,2014.5
20) 一般社団法人建設産業専門団体連合会：建専連アメリカ視察報告書,p.31,2019.5
21) ジーン レイヴ， エティエンヌ ウェンガーほか：状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加，産業図書，1993.11
22) スチュアート・ブラント：The last whole earth catalogue，ポートラ・インスティテュート，1971.6